

兵庫県指定文化財一覧表

種 類	名 称	員数	所在地	所 有 者 (管 理 者)	
重 要 有 形 文 化 財	建造物	五社稻荷神社本殿 <small>ごしゃいなりじんじやほんでん</small>	1棟	丹波市柏原町柏原字谷田 3565-1	宗教法人 八幡神社
	彫 刻	木造阿弥陀如来立像 <small>もくぞうあみだによらいりゆうぞう</small>	1 軀	加西市北条町小谷 479	北条町小谷区
	考古資料	望塚銅鐸 <small>ほんづかどうたく</small>	1 口	加古郡播磨町大中 1-1-1	県立考古博物館
重 要 無 形 民 俗 文 化 財	無形民俗文化財 福崎町鍛冶屋のかくしほちよじ <small>ふくききちやうかじや</small>	—	神崎郡福崎町八千種 (鍛冶屋地区)	鍛冶屋区	
史 跡 名 勝 天 然 記 念 物	天然記念物 笠形神社の大スギ <small>かさがたじんじや おお</small>	1 本	神崎郡市川町上牛尾 2038-1	宗教法人 笠形神社	

兵庫県指定文化財概説

1 ごしゃいなりじんじゃほんでん 五社稲荷神社本殿 1棟（建造物）（丹波市）

五社稲荷神社は、丹波市柏原町にある八幡山の北側に位置し、江戸時代には柏原の城下町にある北三町（本町・中町・下町）の氏神として信仰を集めていた。本殿は、本体に向拝が付き、向拝の前にさらに張出が付く。屋根は入母屋造で千鳥破風が付き、向拝の張出部は軒の入隅と正面側に隅木を入れた隅木入向唐破風造である。本体は桁行三間、梁間二間で、奥行中央よりやや後方に内外陣境を設け、後方を内陣、前方を外陣とする。



本殿正面

この本殿の特色は、第一に丹波地域の近世の神社本殿の特徴である向拝の前にさらに張出を付けた形式や、張出部が隅木入の向唐破風造になっているといった、複雑な屋根・平面構成である。第二の特色としては、柏原住の彫物師である中井言次（君音）作の動物や龍の立体的な彫刻を施した、豊富な装飾があげられる。建設年代は棟札から宝暦六年（1756）と明らかで、大工は塚口新田（現西脇市）の飛田平蔵と判明する。また、改造はあるものの痕跡から元の形式も明らかとなる点も重要であろう。

以上から、五社稲荷神社本殿は当地域の近世後期の神社本殿を代表する貴重な遺構といえることができる。

2 もくぞう あみ だによらいりゅうぞう 木造阿弥陀如来立像 1軀（彫刻）（加西市）

本像は、加西市北条町小谷に所在する阿弥陀堂の本尊として、厨子内に安置されている。髪際高三尺の阿弥陀如来立像で、表面は漆箔仕上げとし、構造は寄木造りの技法で造られているようである。

右手を胸前に上げて左手を下ろして、来迎印を結び、左足をわずかに前に立つものであり、理知的で端正な顔立ちや、服制、あるいは着衣の衣文表現を合わせ見れば、快慶の初期、いわゆる無位時代の安阿弥陀様の作例に共通するところが認められる。本像の制作者については、銘記が確認されていないこともあって快慶とは断定できないものの、快慶工房乃至は彼の周辺の仏師の作と見なすことは可能と思われる。



阿弥陀如来立像

保存状態については、頭頂部に干割れ並びに欠失部があるほか、頭部右後ろの別材、左足甲部などが後補のものに代わり、漆箔も後補のものともみられる。さらに、X線透過写真の所見を加えると、表面からは彫眼に見える両眼は、後世に像内から別材を当てたもののようで、当初は玉眼嵌入像であったとみられる。ただし、木眼の嵌め込みは丁寧な処置が取られており、その修正は面貌の姿を大きく損ねるものではない。

本像は、保存状態に多少難があるが、安阿弥陀様の作風を継承した作例として評価できる。

3 ^{ほんづかどうたく}望塚銅鐸 1口（考古資料）（加古郡播磨町）

本品は扁平鈕式新段階の六区袈裟襷文銅鐸で、土製鋳型を用いた鋳造によるものである。全高40.2cm、最大幅25.0cm、重量3270g。鈕、鱗の縁と飾耳の一部に欠損はあるものの、全体的に遺存状態は良好である。

大正年間の耕地整理時の発見以来、多木氏により所有されていたが、現在は県立考古博物館が所蔵している。身下部には多木氏により出土地を記した紙片が付されるが、大部分が劣化・剥離している。

出土後の聞き取り調査によって、耕地整理で破壊された望塚から出土したと明らかにされたが、望塚の正確な位置は不明だった。しかし、平成16年に望塚伝承地付近で発見された埋没古墳（東沢1号墳）の発掘調査の結果、この古墳の墳丘が望塚と呼称されていたものであると特定された。このため、播磨地域において出土地が高い確度で特定できる銅鐸として貴重な例である。



望塚銅鐸

4 ^{ふくさきちょうかじや}福崎町鍛冶屋のかくしほちょじ（無形民俗文化財）（神崎郡福崎町）

かくしほちょじは、成人の日の前日から当日にかけての「歳の当」で行われ、また1月26日の「宮の当」とあわせて、住民のなかから輪番で選ばれた9人の当人によって行事がなされる。

この行事は、播磨地域の小正月行事に多く見られる「トンド（ほちょじ）」と「狐追い（キツネガリ）」に加え、「サイノカミ」の祭を行うオトウ行事が複合したものであり、当人が組み上げたほちょじ（トンド）を子どもたちが解体して隠すことが特色である。行事の名称「かくしほちょじ」

もこれに由来する。また、「サイノカミ」のご神体の丸石を掘り出して祭り、帳渡しの儀の後、「無言の行」「狐追い」を行い、ほちょじの火に入れ、埋め戻す。

明治20年からの「順番帳」が残されるとともに、福崎町教育委員会によって、伝承を含めた記録映像等を作成しており、これらの記録から、社会の変化とともに柔軟に行事の運用に変更を加えつつ、伝承していることがうかがえる。このように地域の集まりを重視する社会的土壌が、この行事を継承していく原動力となっている。

以上のことから、かくしほちょじは社会の変化に応じ長く伝承されており、少子高齢化で行事の継承が困難ななか、子どもから大人まで地区の住民が関わり、小正月の複合行事が伝承されており、兵庫県下の年中行事の資料を提供する貴重な存在である。



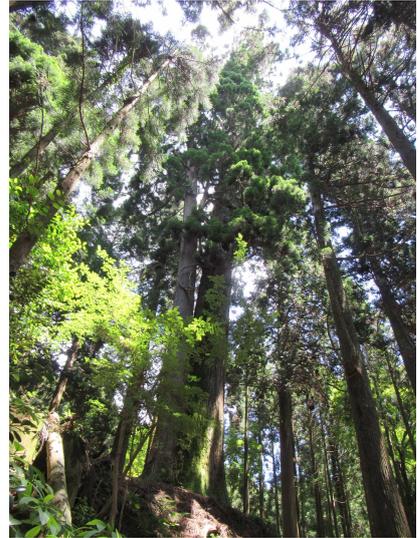
帳渡しの儀

5 ^{かがたじんじゃ} ^{おお} 笠形神社の大スギ 1本（天然記念物）（神崎郡市川町）

笠形神社は神崎郡市川町にある播磨富士とも呼ばれる笠形山（標高 939m）の中腹に位置する。創建は孝徳天皇の代と伝わり、古来より雨請社として知られ、現在でも地元からの信仰は篤い。

大スギは笠形神社の神木であり、樹高約 50m、胸高幹周 9.5m、地上 5 m付近で 2 幹に分かれ、その姿は力強く、樹勢も良好である。胸高幹周において、県内のスギで 3 番目の大きさとなる。兵庫の巨樹・巨木 100 選にも選ばれており、町を代表する樹木として町民にも親しまれている。

このように笠形神社の大スギは、県内有数の巨樹であり、人とスギの歴史的な関わりを知ることができる貴重な事例である。



笠形神社の大スギ